發句茅歌集

秋

へ 5
1869
3

發句萬題集秋惣目錄

秋之上

七夕　文月　初丁　今朝秋　立秋　二丁　初秋　一丁
立琴　四丁　星逢　五丁　星迎　六丁　別星　七丁　硯洗
天河　願ひ糸　鵲橋　八丁　貸小袖　芋葉露
池坊花　逆寒入　九丁　梶葉　草市
迎鐘　迎火　芋売賣　魂迎　魂祭
盆　十丁　棚經　十一丁　墓參　瓜馬
蓮飯　麻木箸　刺鯖　燈籠
切籠　十三丁　摂待　門茶　躍

生身魂　十五丁
施餓鬼
地藏祭
散抑　十八丁
桔梗　廿二丁
萩　廿六丁
蘭　廿八丁
藥師草
絲瓜　廿九丁
本瓜實　三十丁
秋蟬

送火
大文字火
衝突入
蓐
女郎花
木槿
大子草
翁草
刀豆
蓮實飛
秋蚊

盆月　十六丁
妙法火　二丁
養父入
草花　廿一丁
茶花　廿四丁
芭蕉　廿七丁
茗荷花
曼珠砂花
西瓜
秋蝶
秋蚊

盆過
舟形火
一葉
鼠尾花
萩
藤袴
仙翁花
瓢
蕃椒
秋蛍　廿一丁
蜻蛉

鯛　廿三丁
轡虫
茶立虫
鱒蜘
藻啼虫
塒出鷹
扇置
初嵐
相撲

蚯
簑虫
竈馬
稲虫
鉦刻啼
鷹山別
捨團扇　四十丁
秋風
露　四十五丁

鈴虫　廿五丁
蟋蟀　廿七丁
蚉　廿八丁
稲虫送
鳩吹　廿九丁
荒鷹
稲妻
龍田姫　四十三丁
露時雨　四十七丁

松虫
蟲　廿七丁
蓼虫
初鷹
残暑
稲光　四十一丁
花火
霧

秋之中
八月　四十八丁
葉月
竹春
八朔

田面　八朔梅　宰府祭　司召
繪行器　四十九丁　初月　二日月　三日月
五日月　夕月　五十丁　待宵　名月
今日月　五十二丁　月今宵　五十三丁　月雨　十六夜
宵闇　五十四丁　有明月　立待月　五十五丁　臥待
月　秋月　五十六丁　月見　稻花　五十七丁
早稻　中稻　五十八丁　稻　晚稻
稻苅　落穗　五十九丁　稻舟　稻垣
稻莚　毛見　新藁　鳳仙花　六十丁　新米
田守　芙蓉　木屋花　六十一丁
紫苑　鷄頭花　鬼灯　六十二丁　雁来紅

秋海棠　梅もどき　鴨上戶　蓼花
蓼穗　六十三丁　花野　芒　六十四丁　尾花　六十五丁
芒散　六十四丁　苅萱　露草　若煙草
藍花　水引草　蔦　烏瓜
葡萄　冬瓜　芋　六十五丁　秋茄子
零餘子　蕎麥花　蕎麥苅　六十六丁　新蕎麥
粟　粟苅　我亦紅　葛
野菊　間引菜　木賊苅　藥堀
野分　六十七丁　二百十日　後彼岸　六十八丁　放生會
駒迎　駒曳　出代　擣衣　六十九丁
置洗濯　七十丁　鳴子　案山子　七十一丁　引板　七十二丁

鳥却　燒帛　添水　初汐
落水　七十三丁　坐寒　漸寒　朝寒
夜寒　七十四丁　秋寒　七十五丁　露寒　冷
身入　秋日　秋夜　長夜
鶉　七十六丁　歸燕　稻雀　鴫　七十七丁
初鴈　雁　渡鳥　七十九丁　菱喰　八十丁
色鳥　鴨　椋鳥　小雀
四十雀　鶸　頰白　頰赤
啄木鳥　鵙　鵜鴿　豆まはし
鰍　八十二丁　太刀魚　沙魚釣　初鮭
鱸　小鰯引　渋鮎　落鮎

崩簗　鹿　鹿笛　八十四丁　蛇入穴
秋之下
九月　八十五丁　長月　菊月　后雛
菊　菊合　八十六丁　菊酒　菊鱠
菊着綿　十日菊　初紅葉　紅葉　八十九丁
櫨紅葉　九十丁　蔦紅葉　漆紅葉　柿紅葉
草紅葉　紅葉散　九十一丁　不變色松　銀杏
末枯　野山錦　九十二丁　升市　后月　九十三丁
十三夜　九十三丁　豆名月　月名殘　星月夜
秋祭　九十四丁　牛祭　御迁宮　懸別
今年酒　新酒　濁酒　九十五丁　木綿

椎　栗　團栗
熟柿　九十六丁　澁柿　柿
柚　柚味噌　金柑　椪柑
梨子　榎實　椿實　菩提子
茱萸　九十七丁　栴檀實　木實　草實
牡丹根分　芦花　芦穂　龍膽
葱草　葉生姜　初茸　松茸
松露　紅茸　榎茸　菌狩
初鴨　尾越鴨　雀成鮎　網代打
露霜　九十九丁　露時雨　秋雨　秋時雨　百丁
秋霜　秋暮　秋空　百十丁　秋雲
秋野　秋山　秋海　百三丁　秋川
秋水　ひつち田　冬待　百四丁　行秋
暮秋　秋名残　百五丁　冬隣　九月盡

發句萬題集秋之上

冬至庵庚年　輯
八雲東溟　校合

文月

文月や六日の菖蒲あやめ　其角
文月や一人ゐかしき妻子　良徳
文月や人の中なる天の川　寧杜
文月や行くすゑ扇の下あふり　李槃
文月や山を比べん衣替　蓍之
文月や蓋掛ものの音すなり　梅宝

文月や雲のうすきを夜の月
文月や鶴の脚絆のうすくら
雲ぬうや唐土かくやけさの秋
帷子の唐土かくやけさの秋
けさの秋あしとをしへし人を恋ふ
袋足に追つるれけり名の秋
あとそこそこすくすくぬけさの秋
一ふり墨で晴くけさのあれ
一二寸清みて強くけさのあれ
あ清に海のけんくけさの秋
鐘のうち寺や清のけさの秋

秀句
清菴
霞川
為白
暁臺
菅村
菜年
水沢
蒼軒
一有
梅令

けさの秋を病む人の神来て
眼をふれる藤のお見けさの秋
蘇我しと奈の奥やけさの秋
桐の本とそ秋をやけさの秋
帷子に秋柳とやけさの秋
魚の無て砂をけくるの秋
漬物て芋の味ひやけさの秋
動ふるる遠く清しやこの秋
けさの秋鳥も洗ふ人ばかりけり
今さのあ清の寺て唐土
けさの秋あ屋へかくる菊の郎

松秀
子格
岱年
為あ
抱儀
千崖
一具
暁臺
櫻堂
徒年
清菴

二階うら志の書をかけるの秋　寸長
深帖や樓張格敷をかるの秋　掃下
けるあるひとこゝろ極うけの　景文
勢くらべ松すしきをもけるの秋　梅宗
敗の馬ゝちるよふをかけるの秋　大江氏
妹しやとあるひきをうけるの秋　二條人
ちゝよ敷海手の風をかけるの秋　夷則
なるかしとゝ秋をかるの秋　大管
掃くゝる敷長の指をかけるの秋　烏丸
秋の雲をゝうけのけるの秋　丈峯
ひらゝと本葉ゝゝ秋をゝ立　鬼貫

ちゝめゝや秋ゝゝ仲の如れ雁　士朗
馬買に小笠ゝ秋ゝ月かな　白雄
あるゝ月や秋ゝ遠き夜の川　大梅
秋ゝや親ゝ年ゝしを年仲　角寸
あるゝ月や榜の音をゝあるゝ　江月
淀扇秋のゝゝあるゝゝけり　成美
琴の子に男び羽生人秋のゝ月　巻長
立秋や男びゝ絡に生ゝ為ゝ　徳山
ゝ秋や遠ゝる庭に池　杜鶯
立秋や吹掛ゝ雲居に雲ゝ　英夕
秋ゝや初ゝの為に猛ゝ　波同

初秋

立秋の日記すべき事なし
立秋の涼しさ打ちまぎれ
寄合なし紙四枚半仕の
秋来ぬまでの涼しさ
立秋や蓮なの葉の露の秋
初秋の心うこもぬ縄すれ
初秋やふるき枕ぶすま旅
初秋をうらとはんとも
初秋や法華経草第
初秋や汁まぜ別菜
あるじなしとて初秋杜若

子鶴
蒼飢
阜地
陽朗
青戎
風雲
之道
荊口
蒼飢
心阿
樗堂

初秋の月ぬき聖心の那
初秋やまきしかる高山川
初秋やとの戸明けまもの色
初秋や去義を越て素絹
初秋や羽をたれしる人の
初秋や白粉ぬぐ義仲
初秋や笠よりぬき松茶
初秋や温泉場のとり四流ひ物
初秋や素湯の茶屋の生蕎
初秋や浪よりあるの沖の
初秋や蒙蒙多き舟

岳鶴
双島
影石
石石
南枝
沙弥
阜史
樗月
大蓋
丁蛮
樗堂

七夕

初秋や金雲の竹を吹渡る　蓼村
きつ秋の川影よりそふ笹の葉　士朗
初秋をちんと出る鼻の小麻うれ　漫々
七夕やあるを宮ゐたるたもとの秋　[illegible]
七夕や梵偏峰つく笛を抜く　其角
七夕や稲妻雲の浮島も　蝶夢
七夕よりのきねはうらし結合羽　松風
七夕や眼先涼しき青竹の　丁雲
七夕や秋更し軒の無数星　芋[illegible]
七夕や手向の糸よりあまりて　湖山
七夕や嵯峨の塔ゝ仏殿　松軒
七夕の仏よ風あり秋の気　白洲
家庭の父母恵しき七夕の秋　篤老
七夕よりあひろうる名所の郭　乙二
七夕や一人よ寝くの星の影　[illegible]
七夕よ星の糸くゝ山雲れ　二丘
七夕や咲しの西ゝ月と月　[illegible]月
七夕やきのふ村雨の白扇　美水
七夕や松ゝ[illegible]ひ生　一甫
七夕の竹ゝ[illegible]　井仲女
七夕や岸の掃除ゝ人生の毛　[illegible]二
七夕よ国ゝ[illegible]古塊　岱年

星逸

七夕や一人ぬれてまてみる
七夕やはりあぐる秋の風
七夕やうるそう秋をうめ郭
海会よ赤妹うちん待女郎
新まち秋岩ちしこ星の家
星会や離るの月をひくん
大内のうちあるまん星祭り
高ちてふ星を四角ちなる竜
兄弟ら無事や星祭り
京ちん思ひ秋を待ち人参者
書ちれ字ちつまつる中星祭

子路
角よめ
其山
嵐雪
曾良
山樵
千子
大江丸
士朗
梅宝
濤ら

星会や手孫ちん先ちる浦しる和
ちりかるる拍ちちる星祭り
星会や月を今青き輝ちる
星を青きしの姫拍ちを行
梅ち星のちんを拍ちしる蓮原
星祭りちを遊ちる長ちけり
坂ちせん星会の園ちちく光
星会や一人行む川むうひ
星祭会ちる野ちよ咲くなる
のひちる秋の時ち星祭り而ちる
星会や猪ちれ百姓のいちちる秋

夷則
素行
篤三
其山
蒼帆
松軒
月居
竹窓
松什
亀渕
抱像

星近　笹の葉に枕つけてや星迎ひ　其角
　　酒蒸しとなりて酒の香星迎ひ　玄来
　　蹴出すの扇流すん星迎ひ　曉臺
　　ふんどしを蒲団にまきて星迎ひ　一葉
　　知らしらぬ人に出すや星迎ひ　蓼翠
別星　その星の名のうらやましや別星　曉臺
立琴　立琴や秋の夜人を慕ふらし　可風
　　立琴や三千人を慕ふらし　帝国
　　立琴や秋海棠の赤くなれ　乙由
　　いろ〳〵と深なき糸の彩ひなれ　松舟
彩ひの糸　なにまうる初の彩ひの糸作るき　立圃
　　立ちそめし彩ひの糸白ゆうの　一温
　　七夕や糸いろ〳〵の弁のなれ　三人
貸小袖　加へ小袖文ぶくろ人を迎へけり
　　一枚加へ小袖と引ぬ恨り糸　把保
　　ふるさとを知ぬいつし貸小袖　洗糸
祝洗　祝洗ふ起けり祝洗ふ赤き　杉什
　　つゝ洗ふ墨祝ふあるひけり　白邨
　　洗ひ墨祝ふ如祝ふひけり　寸風
大河　蒼海や佐渡を横ふ天の川　玉蕉
　　わが宿や来ぬ一枚ふ糸天の川　其角
　　ふるみゝふるれのやうやうの川　八葉

[illegible]川　[illegible]
[illegible]の川　[illegible]
[illegible]川　[illegible]堂
[illegible]の川　波間
[illegible]川　[illegible]年
[illegible]の川　[illegible]
[illegible]の川　大橋
[illegible]の川　[illegible]
[illegible]川　[illegible]
[illegible]の川　羽人
[illegible]の川　[illegible]陽

山のたいまつ[illegible]の川
[illegible]の川
[illegible]の川
[illegible]川
[illegible]の川
[illegible]川
[illegible]の川
[illegible]川
[illegible]の川
[illegible]川
[illegible]の川
[illegible]川
[illegible]の川
[illegible]川

又
世改
五渡
芸能
一具
樓堂
土朔
樓堂
湖山
[illegible]
惟[illegible]

天の川人を渡りてあしけり
渡りてこれか方かしらは天の川

鵲橋

かさすとの橋を絵入の百人一首
橋よりも島をつくれ夕ぐれ

梶葉

梶乃葉と題詠歌の葉の卵
彦へとて五度の梶を出されけり

梶の葉は

梶の葉や夏の夕ぐれ
梶の葉や夏の夕ぐれ

十分の彦ひと梶の一葉の卵

草象嵌

草象嵌

地紙象嵌

清書
學朗
許六
夏角
夏村
道義
考閑
義雅
英山
義光
一玉

道義

七夕歌の清書
歌の中に
歌の中に
歌の中に

清書
汝正
馬六
梨雅
化考
頑布
一郎
完来
由誓
文越
義重

草売賣

草売賣
賣ひとも草売賣
生ひ出ひとも草売賣

草市

草市の人の方に
草市にてこれは墨とけ
草市や四日の夕ぐれ

近藤

打ちのくとものと近藤

近火

近火や家家皆戸を閉る

近火や父乃伊勢を思ふ

近火や屋根を西に吹通り

近火や裾に寄る人通り

近火や加賀に年経る人三

近火や釈迦の先生

魂近

魂近さうな法師

押しつぶしの戸なし魂祭

魂祭

魂まつり汁も焼物の煙哉

魂まつりあるも当あるもなし魂祭

家石

道灌

白雄

護物

樹室

南枝

椿二

菊三

仙花

蓮花

蘆室

稲妻も光る仏の世の旅枕

まさしくと出さうな妙し玉祭

玉祭よりのまけるの燈哉

あるまるあるまるまるまる玉祭

玉祭や子心らし数珠へ中

居るとも当光る玉祭

あるけるとあるとあるら玉祭

玉祭の明るとくるる燈哉

流燈の灯まうも暑し玉祭

あるまるまる地屋の振り玉祭

玉祭よ羊の夕ゆけるる

伊勢

丈草

素竹

羽人

角太

千瑞

蓬陽

見誠

一甫

南枝

蓼村

晩臺

用ゐられる人形良かりし玉葉
梅宮祭とも夢や玉葉か
玉梅は琴にうつりて法教うれ
玉梅や明子新る梅乃分
玉梅はなくあるに花盛つら
玉梅や遠きうりうて人乃事
玉梅や上座にてかくれ
玉葉り蝶り舞うて葉の色
乳母り為にて又法ぬ玉葉
玉梅や白磐を接ぶ猫の人
殯りて何ハなくて盆扇

蓋

蓋古
板宝
洗家
西月
手枕
まめ
一葉
北枝
山居
多賀
晩春

墓

墓の石ふる苔の露の
人別く崖に咲く
秋乃
桑乃れ
世とともに
梅経
梅経や世に
梅経や
梅経や小信の
墓条
家とも
ふし人も
白銀と
墨
遠元
柳条
井仲如
裏角
梅分
如行
為后
玄来
裏角

燈籠の竹細工にて人物を作り
宵月の美書を貼たる事
他人にて細工の面白き事
小馬　愚案に世の常なり色紙の
蓮飯　松の葉を色むらを蓮の飯
稜々たる細工にて蓮の飯
麻苧著　長短形ひけり麻苧著
利鯖　中鯖を一四半に薬の如し
利鯖中皆通れ共あるを形
利鯖中使の下戸のまぶりを
燈籠　長谷川長男燈籠一つを題する

一笑
完苧
又
寶松
玉考
一盤
雲雀
蕎礼
而后
南枝
其間

父母の子供燈籠を作れる
灯籠をこと度かけぬ義なる
白うりの大小なる灯籠に
灯籠や手をたゝく風流
人位ぬ意なる灯籠の那
方繪にて灯籠自然
風なく時の中に燈籠の那
流れうつしてみる花門燈籠
無中に灯籠の形
秋雨に木の月を燈籠の
さまなる人の足よりする灯籠

由々
美村
尚公
蕎麦
色測
松浦
鯖鶏
守長
負山
二丘
橋月

明きつらくなくも秋のあり灯籠かな　董琴

むき合て旅も稲つまや高灯籠　和風

松笹ふく風さへ入るや高灯籠　娥山

庭先は萩と見合灯籠のかれ　烏友

むくつけ茶手前もし出す灯籠かな　梅通

降りし程雨も折て灯籠のかれ　鵬居

まてる筆で一月かける灯籠かな　蓮陽

灯籠のあらしくも夜すかけり　栽秋

自ありて有分ぬかく灯籠のかれ　濱吉

筆をてやの山家は使う灯籠かな　江戸　蘭秀

神主の内侍の部屋の灯籠のかれ　洪京

切籠

雨に打つく明て夜つく灯籠かな　手裕

高灯籠ひろふ物すり柱の影　千那

盆すぎてあきらか門の灯籠かな　嵐雪

灯をのこす罪も行灯籠の秋　波同

つらぬれはぬれく明ける灯籠かな　素行

提ちる居て百遍も灯籠の声　親文

同じ灯を切籠にしんる衰けり　本国

白骨は切籠蟋蟀秋の露　完来

よき花をえらみの付し切籠かな　一具

行燈をこのもかれる切籠の影　霞外

類ふかり取てみたる切籠の影　左琴

桜待

那もと前ゐ馬飼宿の切鏡かれ　手綜
せりふ八の柱なうらん松の汁　錦雪
せりふゐまそゐせるとよて西へゆく　笑村
せりふ三味線弾きよ世あるし鳥　標良
せりふ方かや八ゐた花茶の細家並　野風
せりふ方かや諸見て居る角力紅　五明
勝ほふ方かや小所を休む松乃緒　杜鷲
せりふ方よ庭丸へ家ふ帰らゐ那　梅室
せりふ方や人先へ来て打く鳥　如去

門茶

年よりの丹精尽ある門茶かれ　一暁
をとり子よあゐを細の手ぬうん　玄東

躍

併嫁の汗ふきく打るをどりかれ　本導
一まどり結人ま見をどりゐ那　尚白
自ひ来る手縮の中のをどりかな　言系
飛入ゐ赴くくをどり上手かれ　五鵬
祖父婆々能支度て出る躍かれ　寔上　了回
傘の背さ才人かりゆるをどりかれ　塞馬
住替まで同し調子や里をどり　蓬宇
ゐりのよ能をどり打汁へ出る兔　夷則
をどり子ね朝に連る扇かれ　浴々
をどり子の親も躍く秋の汁　其流
縁の汁く数く居る躍の手　蒼霜

村と村躍てゆけば
をとりあれば家毒をとり撰分る
門の笛のうち強をとりあれ
社殿よりひくをとりうち
揚こみの亭をとり先躍りて
揚こみの亭をとり先躍れ
揃うちぬめをとりあつる躍れ
沖家をとり先躍をとりて
二枚めを新ぶをとりて
揚こをとり後人の為をとれ
なをとりて終をとりて
をとり為こ出をとり為こ

素樸
永保
鳥籠
藝古
聖業
旦杯
士爲
冷泉
杯軒
素柳
成義

かりをあのをとりやりしをとりあれはの月
杯はは根をとりけりくをとりを山家へ
盃をとりひをとりまりや宵をとり
西をとりのをとりまりをとりをとりて
鄙ぶりや一強をとりて盃をとり
川筋の強振をとりあをとり茶
をとりをとりをとりをとりの川筋
辻をとりめをとりく上をとりをとり
嫁をとりゆくをとりをとりあれ盃躍り
をとりをとりあれ京を振の美しをとり
彫彩の一をとりあをとりの彫

大江丸
梅宮
壮賓
把僧
禾木
曲阜
併外
六條
子兮
蓬丸
雲樵

生身魂　生身魂海の下にぬ親父の部
と称する島と申す生身魂
わきられく蓬の条かの生身魂
あまてらす神の御子生身魂
繁結ぶくよ新衣を生身魂
送火　送火の生身魂
知らず実の山を新家敷
送火やうの人を慰さむる
送火中義の浅茅を消敷
送火中志らとを茅の花
送火中仏家の御の祭

其角
次村
拾宝
麻文
子格
兎角
文学
柳江
白雄
乎角
素撲

盆用　盆の用意こうと門を叩く
ちちと人形ちちとい雄を盆の用
ひてちと雌を盆の用
ちの茅をむしく茅の用
人ちと分てまは茅の用
高四一結茅ちう盆に茅の用
草の茅ちと結の茅結用
ちの結ちぬちう結の茅の用
ちちと新盆の用
ちの茅ちと新盆の用
ちの茅ちと新盆の用
打義ちと中清ちう盆の用

盆用

盆

人ゑや秋ゑく晴し雲の月　秋月
雲ゑる第ゑ秋ゑ雲の月　二雲
月ゑ雲ゑの秋ゑ雲の月　洗我
第洗らゑ秋ゑ雲の月　遥流
人の掘ゑ秋ゑ掃門ゑ雲月　寒松
秋ゑ人の雲ゑゑゑ月　岳松
雲ゑゑゑ秋ゑ月の雲ゑ　遥夫
石親ゑ秋ゑ鬼の秋ゑゑれか　文里
突ゑ雲ゑ子の流雲ゑ雲ゑ舟　護物
大文字ゑ一筆山を深ゑゑ　蛍多
大文字ゑゑ一筆ゑと一緒り　蛍飛

盂蘭
施餓鬼
大文字火

妙法火　妙法の火ゑゑ乗ゑ雲ゑ切ゑゑ　一鄙
舟形火　舟形火ゑ消ゑゑゑゑゑ　一映
地蔵盆　ゑゑ盆の中ゑ地蔵の盆ゑの形　雲樵
御家入　ゑゑ大ゑ初ゑ人ゑゑ提ゑ物ゑ　蓋村
養父入　養父入ゑゑ雲ゑ多き板ゑゑ　蔦飛
　　養父の中翁ゑ風ゑ孫ゑ紅　多汁
一　菓　ゑ孫ゑ船一菓ゑゑゑ地ゑゑ新　其角
　　一菓ゑゑ秋ゑ相の精ゑれ　尚白
　　屋敷戸へ掛ひ入けり相一菓　士朗
　　菓ゑ孫ゑ風ゑゑゑ世相一菓　牛心
　　面白ゑ菓けり相一菓　探菓

歌仙

歌まきまきに見る一葉かな　双鳥
日蔭の入る家中を桐一葉　南渓
故郷をあとにして一葉故　素柳
桐一葉落るもろくも破れけり　文子
池あるよりいくかたる一葉哉　波国
桐一葉は故郷らしく　西月
二階にて歌見をする桐一葉　吟嵐
矢指ひめ山にて庵や桐一葉　流ど
一葉まくへ開きものを二葉にて　船舟
手紙にもの入して桐の一葉かな　搖月
辻番の指にて一葉哉　流々
二葉にて一葉落けり桐　陳二

故郷

二葉にて一葉落けり桐　梅宝
あるの行のさしてあけり桐一葉　菊
まるとあるとうなりて桐の葉　為了
落くあるとられけりきり一葉　方孤
桐一葉流色より行て舟　色洞
家ぬしに落るとあり中桐一葉　駝岳
生涯の落をとりけり桐一葉　慈光
庭掃くあるや中寺ちる桐　宗代
月一つ桐故郷まるあるより　素堂
まるしとあり飛て井原よりの桐　壺中
ちる桐芦と秋ちるの桐一葉　色衰

荒物にちんて前やちる柳　一貝
えれしや門を這入たる柳　蝶菓
ま葉りてちりもし笑ふ柳かな　由誓
二階から吹落しけるちる柳　ちう記
此基雛し木の柳ちりけり　樗雀
掃除して後のちりけれはちる柳　素樸
朝まし新あとや柳のちりおれ　尼橋
ちりもしけし諏やかきる朝の声　滄々
朝鳥は濡集るぬさうりう那　たた成

蕣

蕣にわすれし今や帽子　其角
朝皃や枝に蕣折敷番宿　去来
朝皃や青く朝をれの跡　杉風
朝皃や枝に明きりし君乃色　史邦
朝皃や借りまあし始朝落　古琥
兜年の朝皃んんと渡すけり　江三
朝皃や見向しのよ泊り宿　雲鶴
朝皃や統りありしなけるの声　鄰
朝皃の叫ゆる佛守の那　貞祇
蕣の垣わをんくとりけり　絶々
朝皃や絶んくいさくおのつや　永保
朝皃や一ッ川汲家つ顔　茲竟
朝皃にあふまり精の露かな　樗良

鶏頭やあかき鶏の□□□池　蓼太
鶏頭や世見えて二輪の友ちゞり　啖雪
鶏頭や白ばかりふさの形　濱吉
あさ頭やすゞしき□□やまる　抱僊
蕣やまた二鶏の花二ッ　波同
蕣や垣の遠さのうしろ　流芸
鶏頭や墨一本のまぎれ咲り　貞山
鶏頭や垣のさけを文使　梅室
蕣や葉えりかたまるくらゐ　一肖
鶏頭の日ましに念佛や出逢　蓮流
鶏白や握て出隣　同士　杜甫
蕣や種約束を□□□□　夷則
鶏頭のひしくや草より鶏ある　雨擧
鶏頭鶏花葉替りけり　華琴
鶏頭や時計さして□□□　吟露
蕣を白□□□隣の花　也雄
ひやゝと鶏頭のさし垣根郎　士朗
鶏頭のけはひ赤ふ□けり　成美
蕣の夕や白鶏あらし篭　蕎之
鶏頭やけさ□□□的ゝみけん　巣兆
鶏頭やけふ八月十五日　乙二
蕣に鶏□□□□□字　風麦

蕣やよ子まゐりしお火売　禾月

朝白や隣も常の茶粥かな　京上　嘯臺

蕣やみなとも好むまゝ柳哉　非窓

朝皃の出にせわしき時計かな　栞峰

あさ〱と蕣さかしお下　川虹

蕣や夜のうみしを咲ける　蝶二

朝白や末枯さぬ茎の数　千格

何さての花の茎小さくぞ咲にけり　百朋

蕣や折て隣の桃咲　一具

朝皃やこゝに藤を籬し　方汀

蕣やつすも先咲けり垣のおく　五緑

蕣やさわしくとき雄のをり　鳥雄

朝皃やさくらぬ蕣に暮れけり　由誓

朝白や蝶朝ちらくも咲のをり　鳳朗

朝白や古寺またぬ朝世常　石后

朝皃や下咲てもあれ乃花　嵐分

朝白の花も手軽き料理哉　阜池

朝白いと何さく旅けしき　万和

蕣や陰張の朝皃咲けり　禾木

草花

草いろ〱拙の花の手柄哉　支紙

七草よ枯ぞ咲く秋の花　言丸

草さまれ慰何も花と乗けり　暁臺

秋海棠　人物志に秋草なり　秋草は秋草の総名なり
虫の声よむに秋草乃花
花嫁を馬に乗せ初る秋草哉　伊勢
陽春に秋草の芽を見て
まんの中に秋草咲けり　伊勢
秋草や師を探ひ出す
いつくにも高くあしを秋草　仙素
秋草に名を付ける
秋草の名を付ける　宗古
秋草の名を付ける　洗我
嵐尾花　年々や嵐尾花の白髪　桃民
嵐尾花の中人義を中年の殊勝　鬼貫
嵐尾花の中人義を中年の殊勝　堅菓
嵐尾花や才の殊勝　晩壽
嵐尾花を折て出て出て出る　茶甫
秋折て出て出る桔梗の蒼う那　左次
嵐尾花の白髪　徳元
秋ひ〻もんを嵐尾花　袁川
西日さす門の〻嵐尾花　紀
花を手に持て出る桔梗の花　古狐
家刈の跡を桔梗の蒼う那　松野
苅あとの〻わつか〻桔梗の花　阜池
袁あけて袁中に切桔梗の花　山分

手を拍て白みたる桔梗
角ちく咲ぬ桔梗のれ　三河　東石
赤きを一枝折し桔梗か　也雄
むらさきとなる野路の桔梗哉　洗秀
ひらくと稲妻はけしや女郎花　玉英
夕野山を只吉れけり女郎花　涼菊
秋の分面ゝ道や女郎花　芦本
我ものゝ秋ゝ淋しき女郎花　夢古
手折ゝ秋風ゝ吹ぬ女郎花　大江丸
又ゝ手ゝ皆丈拵ゝ女郎花　多ゝ
新ゝ屋ゝ屋ゝ有て女郎花　波田

散ものゝ有ゝ又ゝ女郎花　松什
疫金むし女郎花ゝ咲ぬれけり　雄村
夕ゝ野ゝ山れ吉りけり女郎花　仲友
風ゝ吹ゝ吉ゝ屋ゝ野ゝ女郎花　夷則
折ゝ手ゝ吉ゝ吉ゝれけゝ女郎花　秋白
吉ゝ吉ゝ仏ゝ野ゝ吉ゝれも女郎花　角偏
以ゝ風ゝ吹ゝ野ゝ女郎花　朶峯
作ゝ吉ゝ吉ゝ吉ゝ女郎花　一具
松ゝ野ゝ吉ゝ吹ゝ吉ゝ平ゝ吉ゝ　万彩
女郎花ゝ野ゝ吉ゝ吉ゝ名ゝ吉ゝ吉ゝ　士朗
折ゝ吉ゝ吉ゝ吉ゝ吉ゝ女郎花　永狐

おもしろき風もうしなく中女郎花　卓池
井戸の名も聖なる名ぞ女郎花　苔軒
夕月や露の影うつくしきみちしば　其山
乗れかあれもうもう女郎花　袁海
聖ひろけくもあれかしの女郎花　春楽
狂歌面白き形しやもみもみへ　武中
もみもみへ只一本のあらしうれ　有方
世を人のかくもあれ女郎花　二丘
時へも今一丁や　もみもみへ　文翠
もみもみへ打ぬてもあるもの　大梅
風もうもう草の中なる女郎花　楼二
　　　　　　　　　　　　　　　子格

萩　花

ヨロヨロ二尺ばかりの低かるい女郎花　鶴
打ぬきて高ひあるけば女郎花　孤月
淋しさや秋の方からもみもみへ　遠長
山里や萩神　柳の女郎花　乗本
もみもみへかれや恨人女郎花　月居
砂原や下草のもみもみへ　丁雲
恋塚もあるもあり男へ　斜嶽
秋の野をひとり行君也男へ　半眠
赤い玉ぬきもうもう男へ　可笑
赤い歳もあるもあり萩ぬきの　もみ代
蒼もうもうもうもう萩ぬきの　其角

野分のあとに見え秋のすゝきての跡　士芳
野分のうちにそれ物の住ゐのれ　其秋
萩咲て鹿は聲ある籠にせ　来山
人まちてあさ霧に待しや萩乃花　逸袁
下露や行くさ舞つ日は萩は花　一具
離れ家も野梅のちかけり萩の花　有人
咲揃ふりもなく萩の露かけり　由誓
萩寺にて涼く来けり宵の月　吟露
花も葉もよそれくて野の露なり　小園
虫とりに来て萩にふ花をなれ　埜葉
萩の花ちりて野よりわりの花　鳥篆

ひとまちりして裾むらは萩乃垂　波岡
梅さきくや秋野は萩の花　英又狐
山萩やさくといふは下葉茂　梅令
さしたる火縄打は萩乃垂　李撲
刈跡も秋や下葉咲ふれ　烏よめ
露ともまちに枝で散れ萩　藤山
萩の枝は浦のつゆ川原すれ　呂川
秋も今ぞ萩に見れ露笠の上　籬菊
刈られは来よし家なり萩の花　松竹
二階の物干しけり萩の花　崔史
去年の秋は野の萩　梅室

踏まひとふ〻也て秋のぬうこ〻那
方丈ゝ長の留方行ゝ高れ萩
的星花咲〻て咲みたる萩の花
取く生〻ての出芽萩ヶ〻アこれ
萩のもちらねえ〻ちれと却りひけの
山ゝ萩や生〻て行〻れおさう
一数て撰りて〻けの面萩萩
俳句草ゝ生〻れ〻ハつて型萩や
萩の花ちら〻ゝ咲〻ちハ咲〻けり
鈴蟲や萩ゝて〻ゝ鳴く萩を
服的ゝて集ゝ〻ゝ萩の花

抱像　仁里
采木　重芝
子龍　春的
士朗　樓中
樓堂　東溟
丁宏　九徳
慷二　蘭秀
里喜女　月庵
蔓琴　夢古
左水　士朗
也雄　月居

手を〻て〻隙の萩の葉〻れ
ちり〻や面戸ゝ生〻る萩ゝ
萩ゝ生〻ゝ花れ鈴蟲ゝ生〻ゝ
五筋の尺〻ゝ〻ゝ出て萩の葉　伊勢
萩の葉ゝ雨ゝ咲ゝ〻ゝ萩の葉
ゝく出ゝ松風ゝ萩ゝ　江戸
泥ゝ生〻ゝ生〻ゝ萩の葉
萩ゝく〻ゝ一泥ゝけて流る道
晩の月和ゝ〻ゝぬを萩ゝ
笠ゝ〻ゝ老〻ゝの萩の葉
萩ゝ葉ゝ風方角ゝ〻ゝけ

木槿

梅室

我ものうよ船のうち長崎の考
也木槿裏わくへの考しの船
木槿垣也凡ものうに花のけり
おくれしと木槿の也のみうれ咲
川考や木槿咲戸をまき起し
筑考也信也仏ものう木槿の船
多もものけておくるる木槿れ
原汁桶ものう稼ものう木槿れ
おのもくあまれのさめる木槿ゆ
雲家よまく信ものう木槿れ
咲つく垣のものや白木槿

梅室
ものう
親兵
去芳
北枝
嵐蘭
松風
角ものう
梅室
而后
波国

也木槿ものう早起ものひあり
雲ものや中素ものう木槿ものうれひあり
うくと出るものう郷ものう木槿れ
考也考ぬよおものう木槿の船
わくものう越ものうものう考や木槿
表れも親ものつめけ木槿の船
日雑ものかものる木槿れ
日ものの考ものう考槿ゆ
信ものう切ものうる木槿れ
親考の屋敷蔵ものく木槿の考
おくのけものう考ものう木槿れ

白雄
士朗
一茶
遠矣
樵立
外恵
升六
五明
百里
住年
稼翁

芭蕉

秋風や宮々に打て芭蕉かな　几兆

志ら〳〵と芭蕉の外の小借かな　壺里

きり〳〵す日よはめはつく芭蕉の跡　汲村

芭蕉葉や去来が家の井の津ある　露川

坂越して引導取て夜の芭蕉かな　卜枝

見ふりて見易れし芭蕉かな　杜蓼

同じ芭蕉葉に度耳を穢して（？）　蕪年

老いして稲妻かゝる芭蕉かな　標壺

雨風に露のあらし芭蕉かな　蛛多

蘇梼

夕日さす庵にあらし蘇梼　松兮

吹くれと縁にうつしけり梼　岩白

蘭

庵にも句ぬくはかなし蘭の香　巴毅

蘭の香や南に立たるかたよせり　桃隣

蜂もなれ何人あるか蘭の花　蓼太

まさしくも葉に古人の匂ひ哉　士朗

蘭の香や涙次まりし一つ先　曲阜

秋の蘭蘭かなくやも白し　蕪村

犬子草

ぬすむ人なりなにかはす犬子草　朱葉

若萩花

忘れても若萩花を　五明

仙翁花

蕗の花に見しても仙翁花　蕪光

葉鶏頭草

葉鶏頭草にあきさし雲の後けり　雲樵

翁草

翁草二百十日を悲かりし　蓼雨

[illegible]

瓢

莫角　鬼賈
可木　南南
一具　長紅
浮之　里人
其角　伯意
蕪村　素行
希因　三峽
禾木　健角
素樸　雨堂
松海　朶峯
東潮　三平

怒瓜

[illegible]

刀豆

西瓜

[illegible]

陸奥

抱へ出て濱ま西瓜の披露の外　悠子
魚さへて祝ひに切し西瓜かな　探之

蕃椒

青くても赤くてもなを唐からし　花武
主従の思ひ違しや唐からし　亨石
下宛んで減ることのなき唐からし　澄波
摂小本も紅葉しにけり蕃椒　宗円
初物といふても似合なし唐からし　多よ女
つまみ切る時眼に立ぬ唐のからし　素樸
絆の唐からし出ることもなかり　棋十
其ふりや一のと切りの唐辛　蓬宇
積は雑まに何をつくる唐からし　古掌
かやうえおりて盆の如唐からし　其山
根からみや垣ま千る唐からし　千狼
鶴に路おぼえけり唐からし　沙路
小自由しるの先に持や唐辛　而后
唐からし靜かに盛る物なりの　泣表
つひまだぬ白せられけり唐辛　二けん人
百からていふ事の色唐からし　木節
宝家の脇に残る唐からし　梅室

木瓜実

木瓜の実や龍きるゝ絵ぞある　雲樵

蓮実 菱

蓮の実や兎き陸の家ちかく　精雄
菱の実に蝶あまり飛び舟る　草庵

秋蝶　秋草に何のゆかりとまりてか
いろくまでなる秋の少蝶
あきくれぬ秋の蝶
道芝はあきの実と秋の蝶
かれも一出て秋の蝶
秋のてよつをんくこうの蝶
晴れと新と秋きぬあきの蝶
あきのけしひとり秋の蝶
つまれと秋しるあれの蝶
秋のてよ立ぎうれけり秋の屋
さてさてなれりとあくと秋の蝶

万子
牧童
白毒
寒松
風朗
稲花
左尓
洗我
猫雅
横室
沙弥

秋蛍　蛍なれらぬ秋のかるれ
牛の尾ようてく秋のほるかな
横山を秋のあるかぎ
ぬけかとけんく秋の蛍
秋蛍　秋の蛍
日よ向てく嘯秋の蛍
秋の蛍秋の蛍
やとまれ家のけり秋の蛍
秋の蛍其日暮しの蛍
奇語よ嘯てゆくけり秋の蛍
秋の蛍秋の蛍

知
笑
芝
丈
山
雪
閑
横
池
雪
言

秋蝿

蜻蛉

秋の蝿乃あをかなくハ哀なり
何をの蝿のせをりなくまを
むれ飛る蝿や浪とゝみの汐
飛る蝿や客せを哀なきみ汐
秋の蝿かゝ人もやく見ちり
人中をなれ〻やとのきの蝿
旅人の笠つ乗り秋の蝿
蝿なく秋ちあそれのうゝ
面白千る石ゝ居つゝや秋の蝿
うんちゝ秋つきの山しまの上
うんちゝの鳥ちゝ目玉れ

林紅
大石丸
蓼恵
素樸
秋ゝ楊
楊宝
雲樵
花外
芝石
ちゝ紅
如是

うんちゝや板の端ある笠先
うんちゝのさゝ一番ゝ日向れ
日ゝ鉢屋の横ゝうんちゝ
うゝく笠ゝ日向押へゝ横ゝ
以ゝの寺ゝ寺ゝうんちゝれ
笠ゝうゝうゝ人ちゝ
板屋を降ゝうゝ雨ゝ
沖嶋の風ゝちゝうんちゝ
うんちゝや笠ゝ板ゝ白ゝ
日ゝ笠ゝこゝ見ゝうんちゝの
我庵ゝうんちゝ松ゝれ

探丸
宮白
蕉村
蓼古
樗堂
真山
楊立
竹安
五楊
酔山
乎用

一葉
岳格
多海
柳居
洗亦
士朗
雪窩
東翠
朋人
二丘
水仲

調
虫

護物
歩て
涼鈴
弥五郎
虎妻
和式
君白
白雄
文子
鬼貫

[illegible]あまれる撰びあまれる虫の声
[illegible]芭蕉よりひくく出る声
[illegible]の中へさし込る馬乃鼻
虫なくや踏て捨し小路　　真宝
月清て虫なきあるしの下きれ　　許六
虫なくや近てなつかしき人の声　　遠良
[illegible]の蔭よ虫の声くなるあしし　　梁美
虫なくや寂なりし[illegible]畠　　閑更
うつてあやりたる[illegible]虫の声　　左珍
[illegible]めけり虫の長り[illegible]仏堂　　湖山
虫なくや[illegible]長[illegible]し　　徳翁
寸長　　遠月
[illegible]　　寂

世[illegible]かりて[illegible]中虫[illegible]寂寞　　伊勢　　茅屋
[illegible]此ぬうもかるなくや[illegible]の虫　　篁洞
墓[illegible]石[illegible]の[illegible]虫なくや[illegible]の声　　義非
虫なくや冥[illegible]ある畑[illegible]中　　磯山
あるや[illegible]流[illegible]ものむの声　　伊勢　　義涯
[illegible]虫の声　　陸奥　　孫屑
[illegible]むやむの[illegible]　　恵風
茅畑や二茅[illegible]中の虫の声　　為白
[illegible]月[illegible]虫の声　　一指
虫[illegible]の[illegible]虫の声　　[illegible]
虫なくや[illegible]の[illegible]の[illegible]け　　川文

其山
籠屋
義竹
丁宗
乙物
仲山
笑壺
茶三
山雄
松軒
宗明

由譽
鳥茶
阜池
何兎
三位人
杜有
夷角
雪竹
南枝
の結
滑蕉

終

虫

松虫

往のへり鈴虫のなく堤かな　採菓

松むしのなく秋を松の匂ひかな　沙明

松虫と啼こは先よけふ新家　東来

松虫の声に飛つく戸口かな　其流

轡虫

浪乃寄引くつわかれし轡虫　月底

綱付し轡むしいかに揃見の声　林曹

簑虫

みのむしの青きを雪の朝顔かな　李世浅

みの虫や形に似合し月の汗　杜芳

みのむしに落ては濡す夕かな　葉也

このむしの糸綱しても蛙の声　句其

みのむしの帰る枯木の風情かな　澗泉

みの虫にひとり秋老る姿かな　花月

蟋蟀

白髪ぬく枕の下やきりぎりす　はせを

灰汁桶の雫やみけりきりぎりす　凡兆

菜飯其子半分汁盛きりぎりす　霞川

桶の箍やきれて啼止きりぎりす　昌房

出る月や野分とよする頃きりぎりすも　其角

常に野や堅あってかりまくらきりぎりすも　嵐雪

寒けさも八宿まさりけりきりぎりす　丈草

行燈をまとひて啼やきりぎりす　松軒

下居て根かつらとるきりぎりす　一具

あらしの野菊に添まるきりぎりす　西月

戸の蔵へまゐらせやれのまうらん
きりぎりす鳴時分こそ二重
茅舎宿のうせぬ時やきりぎす
宵の門都中を消ぬきりぎす
菊ちらしう所のかなきりぎす
虫鳴て廣てきくやきりぎす
寄きる草の動きやうくも
うけ笠をつとめやれのきりぎす
塚会よ蔦ふきうきりぎす
きりぎすなく中ゆ燃て風吾れ下
蔦ちる蔦と稿ふ年やきりぎす

世改　岳猫
貞山　浸ゝ
芝恵　小柳
恵伯　乗菜
蔦静　恵盛
双鳥　百明
素樸　浸ゝ
信年　古明
三岳　抱像
孤山
島津

鉢蔦して赤ゝを球のきりぎす
きりぎす鳴葉ふ鳴ゝ鳴ゝ
蔦ふ蔦ふ鳴ゝ鳴ゝ
言義中月鳴ゝ鳴ゝ
鳴の蔦ふ鳴ゝ鳴ゝ
きりぎすなく蔦ふ鳴ゝ
鳴の中蔦の中きりぎす
きりぎすなく蔦ふ鳴ゝ
きりぎす鳴中ゆ鳴ゝ
つれなく鳴ゝ鳴ゝ
自ふ鳴ゝ鳴ゝ

螽斯

きりきりや鬢に乱れし秋の月　風意

はたおりや恵まる機の夜仕業　乙語

はたと捨ぎ手に又きその口拍子　五筑

茶立虫

燈ともす月夜を見よや茶立虫　梅室

茶をと云ふも杖も飛行の法　菊阿

淋しさの一つや茶立虫　素柳

茶立虫宿も紅葉でき枕元　東原

竈馬

竈の家は小海老にまじるいとゞ哉　竹戎

縄の蔓に落ちられぬいとゞかな　昌房

やむや水に境の中の外　誠人

茶飲み茶壁に声する宿かな　里桃

箕原椎子声もあやしきいとゞかな　嘯臺

手探りにまさぐるもの叩くかな　碧山

蝗

蝗や親父に似たる浦の松　北枝

蝗や菊の酒やる裡の人　孫屋

蝗や鳴合ふ声一つ飛ぶ　源芝

螽

前あとや雲井に飛ぶ螽　嵯経

雲にさらし螽飛ぶちりの何し　岱水

草の戸の裏に飛つく螽の群　ふ卜

飛ぶ蝗や人にはらはら飛ぶ螽　因思古

あけ浪に足をぬらす螽かな　因露

旅やまた螽の飛ぶ日和かな　茶得　守夷

蘿屋
物宝
芳雲
沙路
石后
為消
櫂雫
慈光
護物
雲護
白

月庭
洗亦
野乃
孤碩
之道
従之
小蘇
護物
子那
三峡
鬼貫

端
端
稲
稲
藤
藤
姫
姫
姫

李由
乙由
文考
曲象
一具
波国
桂宮
心阿
仲恵
桂武
京国

扇夏

小麦
為白
著之
永年
手絵
常角
深流
用舟
文紙
其角
去来

扇

扇子
扇子
扇子

稲妻や知らぬ人の家の前　聖波

稲妻や山かつ人の孤屋　丈子

いなつまよりけさの小家うれ　孤白

いなつまに古仏拝む聖哉　義分

稲妻や一つとみる新墓　遠流

いなつまや柳をとる姥の郎　角よし

稲妻や誘ふ月の山もれ　著行

いなつまや何よ寄合一長家　尾張　一清

稲妻やひとりひとりの夜むら　惟子

いなつまや遠を義人の郎り　美濃　李関

いなつまや女郎の懐子　二丘

稲妻や寺と行くべき先てこの郎　素六

稲妻や寺に寄きし如篠ぶ和く　卓池

稲妻のわつかれ杉の庵けり　梅井

稲妻や翌ろ人の義　乙二

稲妻ちんこ百ト梅ーせ義稲　遠兵

稲妻や寄らぬ海の辺哭　遠字

稲妻や遠ろあとう梅の戦き　杜鵑

稲妻や女郎の居つ山くれ　梅宝

稲妻や柱の根ゐの乳くまて　蕙古

稲妻や静なりきあれ新宅　冢史

稲妻や人の寄みま遠ひ毛　雄美

稲妻や高つき砂を打ちうつ　新
稲妻や活潑潑地の面のうち
いなつまや静かに一光百也
稲妻にちらり〳〵清水哉　芭蕉
いなつまや高山の木の葉ども
稲妻を見るとは思へど哀れ
稲妻にくらんくらんと秋の那
ひかりけり　稲妻や笛に諸
稲妻や浮世をあらう鹿山　越人
稲妻や伐れし神の枝　去来
稲妻や法華の経の紙ぶち　趣路

稲光
初嵐

稲妻や何うち数の中
常に見る雷場の柳や稲光
初あらしかくもまぶしき栗の穂
辻うらの雑一ぞ中初あらし
紅吹の揺るもうつくしき嵐
七絵の世の門先や初あらし
ちみ汐よ松葉にちらす嵐
初嵐小魚浮いて寄せけり
ちる嵐三日川をあらけり
あらくとうたれぬ秋風
俳句木に魚をぶつる嵐の風

秋風

揺山
山外
ちる秋
壁坡
孫碩
杜蘭
甚山
逆流
うつる
ちる秋
嵐雪

十間ばかり小牡ばかりの秋乃風
林はまだ青くもあれども秋の風
とゝのうこと分もあやつる秋の風
あるれけるまゝ秋の秋の風
野もとゝ秋風ふく中屋の妙屋
大池やこゝろとあるの風
波穏なる妙やふく中あき風
雁の音聞ふくもの秋乃風
十年植ゝさりくふく中秋の風
結搔ゝ天竜つゝ松やあるのもゝ
あるゝ家ゝくゝ原の秋乃風

許六
芭蕉
洞白
鬼貫
乎月
蓼吹
塞馬
几董
田学
所天
里樹

秋の風
秋風やゝ人ゝよりけゝ乃糸
秋風や堤下ゝれの松ゝ鶴
秋風やゝ千魚ゝけゝる濱底
刑乃部磯ゝ合ゝ乃中秋乃風
四方ゝ秋風のゝ撓ゝの鄙
あ秋風のゝくゝ蓬のゝゝゝ
秋風やゝ人のゝ乃ゝ先ゝく
秋風や所ゝつく屋の一ゝ星
秋風ゝの乃日ゝゝゝき風ゝ場の孔
折ゝ佛ゝくゝ乃ゝ秋ゝ

卓池
蓼方
林曹
蓋村
心珂
素樸
多ゝあ
平波
掬曙
千柏
樗良

苟莫和歌却つてはなく秋のうた
汗のよ玉をへよりてあるの風
秋風和歌は嘉祐や玉葉の
あとのおもてしくはりて秋の風
秋風や清少納言はりの
軒ちかき田あるしなりけり
芭蕉翁奥の細道
舟の岸のちかくに人をたてて秋の風
蓑をうへく年老まへ蛙田哉
俳諧師芭蕉
むしの蓑紙のうしろの蛙田哉

蛙田哉

一具　史子　北石　蓑虫　東源　物宝　流面　一眸　乙二　洗亦　其山

一面に花火の写されたる
比次に次に切りの舞
ちりまきて消ゆる花火
うつくしく枝の花ゆ花火
空中けん明のうつるまで
繁く花火よりまれ出る
ぬしてしてあるうしろ花火
和の花のつりてさそふ花火
源氏物語に蛍の舞
蓼の花の蓼の花火
河の時の沙家の花ゆる花火

其角　神叔　桂夕　抱儀　探策　丁宝　南枝　二丘　素樸　夢古　和風

相撲

[illegible]

[illegible]

[illegible]

丁出
西誓
抱儀
蓬宇
素雲
鬼貫
其角
芭村
素丸
一色
雀波

水石
山背
蝶夢
枝内
西誓
小園
定恒
帝尺
乙良
芭琴
丁酉

赤藤　武治
其山　梅谷
然美　乙二
菅屋　万籟
赤文　一茶
擂堂　可都里

霧時雨

霧

月屋　子拙
素撰　一青
茅舎　夫仲
北枝　士朗
黄山　沙路
梅室

大井川の霧を水かみ
かけりて井手の山吹の中
西のしらんて風を望む岩の霧　摂ア
驚き飛ぶ雁の夢ぞ残りける　秋の霧

拾令　一首
永年
耕雲

八月

八月や朝ぼらけを山こうろ　去来
八月や一つ星を赤とんぼ　拾葉
八月や日向に別るる紅き紙　浸々
八月や二日の月をうらうら　千代
八月や月ぞ山もの霧の月　李雲
葉月　月見まさひつく中ゝ供の妻　丁雲
升玄　光りすみのぼる竹の葉　素行

八朔　南村
八朔より都のきく場一鉢の花　許六
八朔やたとう敷きを加ふるう　乙由
八朔や帷子きく浜ゐまん　樗良
仲秋や都も八朔郭里童　士朗
八朔の天象うけるやあるう　月底
八朔や一位あてきく色紙味　庚年
田面　奮翁より出り田面の西つくれ　白雄
八朔桜　物ひけりく八朔桜紙をけり　雲英
宰府祭　八月社寺より桜つくく桜乃花　霧渓
同日　まきみおきくいうく中同日　山酒

絵行燈　初月　初月の月より弦なり一人紙寄　古紙
初月や物社寺さ人宿宵紙宿　琴石
表反より事如人来より初月枝　言水
初月や芋米より別源庭紙　移竹
二日月　名月社初出なる二日月　樗堂
三日月　仏より社人なる似生三日月　寂蓮
三日月や子まさきさ子紙　桃隣
三日月のつけ本のつ行ぬき蕎　子良
三日月や六月つ世の子紙　蓼軒

三日月や　七ツ立ちする会也　梅通
三日月や　うしろまで引度馬　祖口
三日月や　まつ人吹元寺あるさ　六悟
柳のうしろ　ゆ　ゆ　ゆ　一三日月　卓池
三日月や　海を　芋ばたけ　馬　仲恵
嵐のあとや　あり〳〵　三日月　永光
不二さま〳〵　等　三日月　籠屋
雲あり　も　森　さ　三日月　素樸
三日月や　あり　暗屋の　魚屋町　西月
秋の秋の　ゆ　ゆ　三日月　蕉雨
五日月　ゆ　ゆ　ゆ　五日月　月庵

五日月　ゆ　ゆ　ゆ　五日月　ゆ　ゆ　ゆ

名月

名月や池をめぐりて夜もすがら　芭蕉

名月や畳の上に寝た人の　其角

名月や畳の上に置く　仝

名月や居酒屋さびし秋かぜ　去来

名月や海に切り込む山の月　丈芝

名月や車きしる山の道　風国

名月や折り枝をくゝる人　仝

名月や煙立ちのぼる人の家　堅坡

名月や寺の鐘の鳴り消ゆる　支考

名月や池に浮かぬ蓮の葉　許六

名月や池に浮かぬ蓮の葉　杉風

名月や池に浮かぬ蓮の葉　越人

名月や暗くなりゆく森の人　二芳

名月や生れ変りて畳の上　蓼太

名月や畳の上に置く風の形　士朗

名月や小ぬかあれば白の紙　道彦

名月や海一杯に白の波　乙二

名月や海一杯に白の波　蓼美

名月や海に切り込む秋の風　樗堂

名月や山の奥にかくれ月　許六

名月の枝を寺の宿の雨

名月や霧は隙より一つ雁　定素
名月や人と相一会寄のみち　千代
名月や拾せぬ人も打交て　園女
名月や来年までのひろう云　素梨
名月や二度毎かしも宝珠　拾宝
屋の名も只此月を事りけり　風朗
名月や[illegible]　一具
名月の晨よ入けり星一つ　万菊
名月や通り寒き拾ちれ　芝石
名月や煙り[illegible]　蓼居
名月や屋さん者の[illegible]　古葉

名月や舟繋ぎあけ八　子猫
風しずか名月波を生りけり　不羅
名月や子を抱て角一周　抱儀
名月とまりてく古工の郎　助宮
名月や鐘も寺和尚の人　永休
名月や乗客を砂と書拾ぬ　乃爲
名月や[illegible]　接月
名月や今宵今まで子の月　水石
名月や去年より拾て[illegible]　游蓋
名月や数の中[illegible]　素樸
名月や聖人生[illegible]一志ゆり　一法

名月や欠へ落る拍子木　万太郎
名月や仲丸拍子木つゝし　残雪
名月や手拭ぶら下り寄ぬ門　候丶
名月や拍子木ぶら寄ゝ　梅價
名月や拍子木ぶら寄ゝ　智月
あるあるぶら寄ゝ　山峰
おむ蓋まりくて　芙蓉
仲一葉二葉ぶら寄ゝ　月夢
つくゝ〳〵辨ぶら寄ゝ　雨誓
かけの〳〵小ぶら寄ゝ　花外
湖ぶら寄ゝ　波間

今日月

科理屋の行ゝ尽てけり月
ゝ〳〵行ゝ行てけり月
格柳も美人もやけの月
ゝみ行ゝけり
雲ゝ〳〵試てけりゝ月
ゝ月ゝ宵ゝ出てけり月
あるゝ〳〵あるけの月
松風のゝ〳〵しけの月
雲ゝ〳〵行ゝけの月

月今宵

月今宵ゝ年ゝ月〳〵
仲行ゝ〳〵月今宵

九月
九月
九月

月雨

十六夜

[illegible]月の[illegible]月今宵
家[illegible]月[illegible]月[illegible]
[illegible]月今宵
光星あり月[illegible]
[illegible]今宵[illegible]月[illegible]
雨の月[illegible]
[illegible]月[illegible]
破[illegible]傘[illegible]一[illegible]月[illegible]
[illegible]月の[illegible]月
十六夜[illegible]
[illegible]

云蓍
道夫
槐堂
深夏
為白
越人
塊翁
文昇
弦山
[illegible]
去来

十六夜や[illegible]人の思
[illegible]の世[illegible]十六夜
十六夜や[illegible]
十六夜や[illegible]月の子
十六夜や月[illegible]
十六夜や[illegible]の[illegible]
[illegible]十六夜
星一つ光[illegible]十六夜
十六夜の[illegible]
十六夜や[illegible]
十六夜の[illegible]

乃由
[illegible]
丁知
[illegible]
士朗
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
乘[illegible]
一[illegible]
[illegible]同

十六夜の内編に月見れ　琴音
十六夜の雲や湯殿の山　吟雨
十六夜の雲ひけば沖の山　松什
十六夜のちとせ高砂の月　茶静
十六夜や川一すじの月秋ぶ　子格
十六夜や雲のうら波の秀　蕉古
十六夜の関ふるうまく苔の月　雅楽知
宵雲　宵雲や一夜月出を知る　文志
宵雲や手形の石くるの萩芝　保物
宵の月　宵の月や相図をめぐる社会　一清
宵の月　宵の月の雲晴けり月の雲　梅笑女

立待月　立待や用ひ門を秀伝ふ　秀月
外待　外待や秋ひ出ひ出ひ　万和
月　山ちよ茶摘ちよの月秋れ　越人
茅を巻る鶴ひ鶴ちよ月秋れ　許六
分ふちよ分ふちよ月秋れ　霞川
大ふちよ女ひふちよ月の雲　暁臺
松ふけの月ふちよ　土朗
山ひけふ三月ちよの月秋ふ　樗堂
雲ふ雲ふを秋ふ月秋れ　永年
ちよふちよと出て居ふけの満の月　子雄
ちよふちよたふちよ月の雲　湖山

[illegible]月[illegible]を問ふ年[illegible]
元舟[illegible]の時せんの明月[illegible]
[illegible]けて[illegible]山[illegible]月
宿[illegible]れハ[illegible]浦の月
[illegible]の月
[illegible]月[illegible]
[illegible]月の舟
二[illegible]月[illegible]
[illegible]所
[illegible]月[illegible]の一[illegible]
[illegible]山乃月
[illegible]の[illegible]

蕪村
五線
完伍
[illegible]
蕪井
守義
[illegible]
井梧
梅令
[illegible]年
波岡

月[illegible]
[illegible]
出[illegible]山の月[illegible]
[illegible]月[illegible]
[illegible]月の[illegible]
[illegible]月の[illegible]
[illegible]
川上へ[illegible]
一[illegible]月の[illegible]
[illegible]月の山[illegible]
[illegible]人の[illegible]の[illegible]
秋の[illegible]月[illegible]
[illegible]
[illegible]秋[illegible]月
低けれハ[illegible]山[illegible]秋の月

千[illegible]
[illegible]朗
一[illegible]
[illegible]
乙二
[illegible]
東[illegible]
[illegible]徳
士朗
[illegible]
禾木

月見

秋の月ぞ名にあふ人を待つ月見る人をも秋の月
神垣に古ひさしきまつの秋の月　永年
沼先の陸奥なる秋の月　蘇山
名にあふ松に秋の月　貞山
雲をもりくる人を待つ月見哉　宗祇
秋ぞ来る稲葉の露の月見れ　玄素
川添の畠を出る月見哉　松風
麻衣をふまぬ清水の月見れ　浜化
向ふ板敷せぬ月見の座敷哉　鈍人
稚先に掛の下ぬく月見れ　素淵
高くゆの一枚ぬる月見哉　船村

雁宕　二豆　芸汎　茶野　雨翠　丁知　柳雅　士朗　壁坡　西秀

月見

明ぬ牛月ぬる人を忍ばせ
吟ぬ月ぬ池の月見の船
濁りの皆ゆる月見れ
物のつゆ吟しのやむやの月
秋も考へ月見の座の全
ゆ流れ月見れ
二階ゆ人待つ月見の船
月見ぬ月ぬ鏡ぬ船の船
乗人を乗ひ出て月見れ
置乗の乗をたゆる月見乗

稲花

早稲

中稲

稲

正月廿九日小恵の日

稲の穂ぬき出て花咲の節

穂ばらみて穂へ出しけり稲の実　四季　月底

一株を刈て束ねる稲の実　嵐雪　堪二

稲の実や風のまに〳〵笠の中　陸奥　四季

わせの穂や伊勢の国の外宮　宗上　嵐雪

束ね置て刈て穂の中　千鶴　郭公

晩稲

強そうにまく苗切むる晩稲の穂　玄子　来ル

ほつとして畦ぬきけり晩稲かな　探芳　千鶴

稲苗

稲苗のうしろへまはる蛙の跡　祥水　探芳

稲苗より昼〳〵曲る小川の流　波同　祥水

苗の穂一ツ小田中形ち苗代　由誓　波同

穂稗

新の卯ぬき稗一穂稗の穂　其角

穂稗の日ぬき立て歩む道　其村　其角

過ぎ〳〵抜ぬき〳〵穂稗の跡　青角　其村

穂稗抜て新ぬき夕日の新ぬき　乙由　青角

ぬき抜て白〳〵抜ぬき穂の穂　波同　乙由

新田の苗ぬき穂の穂　蘿庵　波同

稲舟

稲舟や むかしの人の棹さす　有長　蘿庵

稲垣

笹垣ぬき稲垣ぬき稲垣の跡　文月　有長

稲莚

ぬきやぬき人ぬき里や稲莚　南枝　文月

毛尺

毛尺衣の袖ぬきつくる袖の穴　一映　南枝

新藁　新わら社箒きの中寇社前　重頂
新わらを埋めれけり六地蔵　都舟
新米　神棚よりこれこそ今きてきて米　貞徳
苔きて岩の俵や米　樂小舟
焼米　やき米や唐土人て寺社　圭布
焼米や浮世捨てる人も有り　宇殘
田守　社人とかり山田守　永年
英落　きり面社をを英の下葉の　活白
下の社の枯れて英落　其行
社殿枯れて英の　林曹

仙花　枯れて尸と箒社等あり鳳仙花　寒松
波一番社の社俵や鳳仙花　殊路
本屋花　本屋や六尺四人かしめかな　重鈴
本屋社なる変れぬ赤さ　其角
本屋くと本屋くと小山伏　為有
紫花　紫きくれて天地の花　茶数
大風社の花天下の松根の花　癸林
今年も咲けて咲きくれる　乙二
今年も咲けて咲きくれる　宜来
今年も咲けて咲きくれる　旦松
屋根かきの花　梢山

[illegible]

川江
[illegible]
聖城
華村
西磐
聖象
平山
拔山
破山
二丘
飯素

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

陽
[illegible]
二
[illegible]
寸長
[illegible]
秦人
曰人
[illegible]
林曹
一約
史郎

雁来紅

[illegible]

秋海棠

梅古抗

野上戸

草花

芭蕉

苦

牧童
士朗
晩壽
一の物
臺樓
一清
一色
蓬宮
五條
卓池
雲居

貝砂
子路
而后
義樵
甚村
風朗
史子
蓑帆
小園
物室
住年

夕風の星野をうつ秋のなかれ　完来
むつまじ秋の夕もの哀なる　樵堂
芭蕉古人をおもひてゆく　江三
はつ神をうつくしんせる尾花哉　許六
吹なびく野末はすゑぬ尾花哉　其角
あつ秋の波の伊勢をうつ尾花哉　梅宮
風吹いなびく白波尾花哉　松軒
いつくしく尾花もまねる夕日哉　一学
夕日や尾花うつくしく風吹　白考
尾花ゆく文月ぬれの雲　左水
秋雲一尾花の中に人の声　多賀

芭蕉
苅萱　刈萱や霧ぬれ白の夕の雨　士朗
かるかやの一の露よりけり　牧童
刈萱に減よあれの出なるそ　巴丈
かるかやの待ぬ秋風ぬれ　宋更
霧ぬれ苅萱干る山田哉　糟雄
萱干る山田哉の夕日の雨　雲慈
煙草　煙草ふかしつかせる煙草　其角
藍　色ぬれて紅藍乾く　乙州
藍ぬれ小かりぬれ引草の根　卓池
菅　菅植て仲四五本あるこれ　素抗

[illegible]

石山の石ぶみも苔ばらら哀

苔のつゆ月まつ草ぬ横の露

何とかく地とまとふ苔の哀なり

苔ぬ茶ぬ月まつ出辺の孔

枯仲や風よ汐寒よ島の

仲藪と人言しけり島の

出ぬ山咲つてのきぬ島の

根つくるもめ淋しき葡萄の

秋の霧よ法師川葡萄の

加ようやもうてきまつ五七日

壁坡　其角
乙州　東木
里東　小圃
越天　丸稜
晩春　蓋年
紫石　宜東
素牛　まさ代
松海　聖雄
紫若　東村
青坡　演吉
蒸光

芋

芋ぬ茶ぬ月まつ里ぬ中畑

山畑ぬ芋ぬ詩ぬ仲粉孔

芋ぬ茶ぬ月まつ詩ぬ孔

芋ぬ茶ぬ月まつ詩ぬ雨

芋ぬ茶ぬ月まつ詩ぬ霧の中

芋ぬ茶ぬ月まつ詩ぬ一座の笑ひ孔

芋ぬ茶ぬ月まつ詩ぬ小芋ぬ孔

秋茄子　われ日ぬ月ぬ詩ぬ中　秋茄子

零餅子　茶ぬ茶ぬ詩ぬ抜ぬ孔

なのぬ茶ぬ仲ぬ抜ぬ孔

うれしさの茶ぬ餅ぬ孔

茶あて茶ぬ茶ぬ月ぬ茶ぬ孔

馬酔木　古個
ふくとてさきそめぬるかな　素白
蕎麦花
三月の地を切りそはのむ　芝代
そそのむ横りよ蓋の赤くの那　百明
秋ききもしめる赤しそそのむ　惟然
山畑や赤かくもてそそのむ　卓池
そそのむこの時きむ山波氣　午波
日に節を接のつきけりそなむ　素樸
山蕎麦人きまるそそのむ　古葉
点されたのてそそのむ　南枝
そそ畑や赤さくなのもりの中　芝恵

赤花　子都
日和さくけきそそ赤しそ八月む　碓嶺
陣合大根畑や赤そそのむ　臭紙
風さ赤清のしてそそのむ　葉郎
蕎麦苗　そそのうよ蕎麦の赤そ波り上　遠亥
新蕎麦　新そそや二けり経の二竹口　一経
栗　栗に穂の蕎麦波遠けり　長翠
栗に穂の蕎麦ゆそ蕎の那　隙葉
栗苗　栗うや一見てそうそ生　僕物
我赤紅　赤赤紅おりて高りけり　赤水
馬ちうそ見のそそりや赤紅　芝石

葛

[illegible]

史邦

山店

通南

桃年

一肖

[illegible]村

一[illegible]

加[illegible]

[illegible]

[illegible]

持寄て庭前を二人発句多れ
椿よあくるとしの人を発句の那　美村
御てゝ多る風ふきぬ発句なれば　三岳
紙屋を掃や発句の神の庭　塞馬
発句をしてゆくゝ紙屋のあるじ　菊枝
いとの一や発句の井戸枝垂星　懐二
五位踏て位ましけるを発句なれ　一笑
大学新人たゝり事発句かな　乙二
加ゝぬや二百十日の日ぬ年二百十日の風ふきぬ　風石
菜太根二百十日の日の新蕎麦の新　去歩
李由　素堂

二百十日

二百十日の二の那　枝玉
実ゆるは山端の二百十日哉　猫雁
四一枝荷てきたる彼岸の那　英山
霧ふけくひのこゑ彼岸かな　巨来
唐粗をとりけて彼岸哉　嘉摩
ゝゝ彼岸かな　成信
人心魚鳥ありけり彼岸かな　石
先ゝ祝ふ彼岸哉　霞川
うれしけ羽色ゝ彼岸　鬼市
山茶や蕾まて彼岸　相雨
礼の高ゝ彼岸　乙由
放生会　松世

放生会

扇の子孫迄ちりけの教生舎　奥秘
榛の花は芋もそよ中教生舎　葉静
義なれく急まれ飛ぶ舎　吉俊
駒迎　挑灯よ跳上の源中駒迎　洋六
口ゑも嘆象ゑ[illegible]駒迎　曲翠
駒迎色塔ゑ[illegible]の義ゑ　正秀
駒迎ゑゑゆしゑ中駒白　蓼村
駒曳　汐曳中岩ゑゑ第拓山　其角
駒曳の云葉耳く[illegible]駒の郭　玄蕃
駒曳中ゆけて甲斐社通留　蓼太
出代　出代中ゆ季の考き振ゑゑ　芭蕉

櫓　砧打てくわれを少せ中櫓之妻　芭蕉
櫓のあるゑ意る名ゑ櫓の郭　鬼貫
お櫓の笑ゑて明る櫓の郭　山川
夢の中の櫓ゑ[illegible]櫓の郭　玄来
小松櫓ゑゑゑあて名山ゑゑ　蕉孔
ゑくゑゑ明ゑゑ中ゑ櫓の郭　蓬宇
母櫓よ櫓ゑ明ゑ中ゑ櫓の郭　千蹊
舟櫓ゑて秋の月ゑ櫓の郭　左不
竹仕舞ゑゑ葉のわきゑ櫓の郭　有方
夕ゑ[illegible]ゑ少ゑ櫓の郭　葉静
降出ゑゑて[illegible]ゑ櫓の郭　籠庵

[illegible]
[illegible]
[illegible]

鳴子

七十[illegible]鳴子ひ[illegible]
鳴子曳二日[illegible]月[illegible]
鳴子曳[illegible]
[illegible]鳴子[illegible]
歳中鳴子曳家[illegible]
[illegible]集[illegible]鳴子[illegible]
[illegible]鳴[illegible]
[illegible]人の多い鳴子の[illegible]
[illegible]戸の鳴子[illegible]
山[illegible]服[illegible]国[illegible]鳴子ひく
[illegible]鳴子[illegible]

其角
言水
乙由
丈子
漢物
[illegible]
磯山
茶至
一素
乙良
和風

茶沢

秋[illegible]
世[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]鳴子の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

士朗
[illegible]
子[illegible]
由誓
一青
南枝
芎居
仙尼
玄来
[illegible]
丈子

菜山子

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

蕨をかりて柄ばかり葉山をうれ
笠つくるとき其の葉山をやちまた畑
うけ月竜ばかりてめてくるき葉山あり
隣田を一ワ葉山をて酒一けり
細ゑと葉山をうと立月りうれ
立てくるる葉山を巻けわ釣仲ゐ
出るあうる葉山をよりひきるくい
吸あれてはみのつきー葉をれ
雨ふれ人よりくはる葉山をかな
立葉山を年を七十二三この船
立てくるて一あしまれ葉山をれ

正象
桃ゑ
赤蕨
葉蕨
路芹
其山
ゑ椒
梅室
乙二
蕉雨
寸長

引板

歌ゑるを背屋て歌ゑる葉山をれ
板ゝ葉山を釈をを多ひけり
ふるきのまあるをを人葉山をい
一信をををを葉山をの弓をれ
あるをを杖て老行葉山を繁
田を畑を一人ををむ葉山をかれ
丈山を屋をいつを引板をを
暁を引板屋を鳴る寒ををれ
引板をいつものをのお竹りれ
人里をあるを寒をを引板の竹
竹ゝ月尺をを人を引板をを

笠来
可吟
柄山
文考
今時
一泉
史邦
秋色
一茶
傾彩
復物

月は白き沈丁花咲くべ
大きれとうはてまれ
焼阜
焼阜
流れ
初汐
初汐
初汐

我竟　正月
雪撰　寒
俳舟の意　門田の穂
秋の中原　雪ちらす
中ゝ　中ゝ　舟の
外意　外意　外意
朝意　外意　外意
外意　外意　外意
外意　外意　外意
外意　外意　外意

陸奥
東里
南枝

外意　外意　外意　外意　外意
外意　外意　外意　外意　外意
外意　外意　外意　外意　外意

梅通
来山
曉臺
一の原
塞馬
寓秋
雪竹
二丘
籬底
子拙
丹芝

伊勢

李内
院我
石鼎
一映
青氏
百人
由誓
許六
来山
不克
好春

生壁ゟ油を拭ひ人秋を哀れ
秋を
第歌ゟ山長へ秋を
病を
病を一蕭ゟ牡丹恨
冷
身入
ゆくすゑを忘ゟ風の吉光哀れ
身ゟ美しや秋を
秋日
秋の月花屋敷ゟ出る小菜畑
秋ゟ
秋の秋ゟ暮て人の哀さよ
初秋
初秋ゟ四ツ年ゟ秋と成よけり
秋の秋
秋の秋や物思ひ寄ゟの内
秋の秋や下古笠の油さし

長夜　此度都て七月社七つの部

長き夜を病家にあかして板面盛
今日もまた人て夜長秋の夜
手ぬぐひ日記とり出して歌かな
長き夜や高砂の恵の月のさし
高てう人きえよくこもあらこも秋ゝ
書物夜を抜そめ入けり
長き夜やいてその後乃一首入
出ぬ嵐もあれぬ夜もの部
傘と嵐のつれしきれる
陸奥や之夜を社乃秋

秋寒　鬼灯　治徳
加賀　富秋
文昇　玄来
牡丹郎　李石
白雄　李路

鶉

風社あしくおかるる秋の寒　東隈
相社ある鶉なくあるる塀乃内　玉茂
うの相もしくなくなる鶉の　文芳
鶉とうたれとなくなれとなれず　湘山
鶉なれや庭のあるうらうら　探象
ふるなくなるなる鶉の部　陽朗
日社なれやまるる鶉なくうら　波同
なく鶉地の底なるのとなりなれ　由之
なるなるなる容易なるなるなるべく　田象
畑なるなるなるなるなるなるなるなるなる　玉義
川山家社樊文清玉序鶉　李路

入れの篠竹き里和うつ爲
おのゝ寺ゝ和ゝき良い鶯の
わゝ屋ゝ寺ゝ入ゝ鳴ゝて寺の
て寺ゝ寺ゝ寺ゝ大鼓ゝゝゝ
然戸ゝゝゝとわゝ和ゝて寺の邪
仲山ゝ家て逝ゝ和ゝ稲荷
何家ゝ陰ゝ寺ゝ稲荷
ゝゝゝゝゝゝ荷ゝ稲荷
逝ゝゝゝ西白ゝ和ゝ稲荷
稲荷羅ゝゝ和ゝ稲荷
ゝの寺ゝ春ゝ山田ゝ稲ゝ

梅室
惟孝
涼邨
其角
寒松
蘆白
芝亮
松什
也雄
梅室
復物

詠悲

稲荷

略

荷ゝ和ゝ寺ゝ稲ゝゝゝの略ゝ寺
源義の略ゝ寺ゝ寺ゝゝ
ゝゝゝ立焼略ゝゝゝゝゝ
牛ゝゝゝ寺ゝ略ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ略ゝゝ邪
略ゝゝや寺ゝゝゝゝ
略ゝゝゝ荷ゝ保のゝゝ
略ゝゝゝゝゝゝゝ西ゝゝ
大池の生ゝゝゝゝゝ
略ゝゝゝゝゝゝゝ一羽
我ゝゝゝゝゝゝゝゝ抗
ゝゝゝゝ沢の略

ゝゝ紙
真角
義羽
文考
士朗
秋白
古瓶
一具
梅室
義攻
羽路

物

序

暫くこれを人々あそび
押えて尚庭わし少略のこと
初序ものこと紅葉の雨
初序ものこと紅葉宿
初序ものこと舟修
ふること初序ものこと
初序ものこと西景
初序ものこと菊
初序ものこと遊女浦の村
徹の吉初序ものこと
初序ものこと

雪居
子猫
松竹
貞祇
井眉
蔡新
一色
徐々
沙堂
士朗
可吟

序ものこと
きくこと島
舟計
鳥帽子
序の
だつ
事
風
舟
序
序
序の

其角
支考
涼菟
為雪
玄来
四人
梅令
猩々
陸山
外面
玉圃

燃さるる柴かきとせて雨の丁
只二羽やあるのんとうて屋の丁
丁うぼのうたやあ山桜小橋や
きう会うたうるれけ泊うて
芦の宮やあうるゆ丁の秀
烟あしの義くはなし丁の烈
丁ばうや物を鈴れハ恵山を地
あれ男りうきうへ小田の丁
わうて丁十やこ年てけうう色
寿雪うて十りうまうて山田の丁
深山路や夏りかりの丁のう

梅井
莫山
健雨
多多
山分
梅宝
新鶯
白雄
未木
風也
李池

雪やけの年歌よ乃ぶ波うて
明りや芦さうくうるよ丁
丁ばうや梅市翁うる雨うう
うるるるるるるるるるや波うて
仏をくりうれハせうて丁の秀
加ぶ氏年波うるなるや丁の秀
丁美よ秀うよりの五う川ぶれ
芦ま丁古部けしまをさくも也
丁の朋うれ風うるる閑う郎
明れて秀う月教を後世尚の丁
丁なくや槙の口きうう人のり

茂雅
子格
伯壺
素樸
英夕
雄二
士朗
月居
乙乙
浸う
由誓

渡鳥

耕雲
玄来
葛村
是石
琴高
笠砂
一魚
陳石
山分
鳳可
梅寅

蓑笠
元高

鞆

孫高

茅蓐
也雄
孫功
彦汎
護物
孫頑
玉倫
李圃
荻子
山木

[illegible]　粗文
[illegible]　為よ
[illegible]　一條
[illegible]　一茶
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　可吟
[illegible]　孫頂
[illegible]　[illegible]人
[illegible]　小義
[illegible]　[illegible]

小菊
四十菊　君の名はあらとよまれて四十菊
世の中はわらうて四十菊
かしこまりて出てきされば四十菊

鶏頭　白　篠原や秋の細みを引く鶏白
　　赤　鶏頭のひとつ抜けたる赤
啄木鳥　木つつきの入りけり藪の杉

[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]

石ゆもしの人ものもむかしうの
ものがたりに河原に腐つるものれ
白雄
冬至
兆若新
三峽
行之
之道
巴山
花笑
丁巳
素生
涼莫

古刀魚
古刀魚や名ものに尾丁ものけぬ者
古刀魚の組板をへる雨板れ

沙魚釣
沙魚釣や入りよかしの赤い点
五六十法老婆してたもいい
稀えて沙魚つる男非番れ
ものもつりや結句よくつるものもの
沙魚つりのものもの釣を結び色

初鮭
鮭のもの紀寛々喜腐の雨板これ
初鮭や市中を通る浦船

鰹
鰹釣上る鮭や宮ものもの古刀魚の
ものもつりもものもの市中鮭釣
涼しさ庚戌ものつる鮭の船
川沿のものもものもの鮭の船

由誓
文考
柳居
昌房
梧城
祖心
柳風
梅宮
平波
鈴鷹
南枝

小鮒釣
小鮒や可川菜ものもの鮭の船

泥鮒
泥鮒ものもの市中鮭の釣
ものもつる鮭のものもの平市西
ものもの鮭の船也川の西日うれ
ものもつりものもの鮭のものもの
ものもの平日鮭ものもつや鮭ものもの

蓑鉢　蓑鉢や月よりとしの形き
指つんさる船のさしもや蓬切し　素園

蓑鉢の名は鹿と日菊とうれ　梅宮

蓑鉢や海へとしる泉川の桜　本老

菊藥　ゆり寄る魚のさしもや菊藥　山分

名さしもさしもの海中菊色藥　丈草

風呂や菊色藥の藥は併　防風

用も多き藥の藥ーー菊色藥　子格

ひとしく鹿を名ーー秋の鹿　祖仙

鹿　鹿下てく尾上さしもん鹿は名　さ代

ひとく鹿を指の底のさしもん生けり　北枝

玄来

北嶺嶽や明をさしもん越鹿の名　丈子

鹿ひとくやさしもん新名のあと　聖悟

百山は松をさん生けの鹿の名　知足

鹿の方ひとしーー色は稼　許六

鹿吉てけとさしもん羊鞭の名　子格

鹿さしもくや二足三足はさしもり　知風

源柿をもきあく秋也菊の名　里人

さけしさしを押えさしもや菊の名　南枝

はは菊二ッよ蓑しもえけり　其源

菊の名油さしもんくしもえけと　吟嘉

ひとくさしもん鹿さしもの小田の菊　物人

小男鹿の麻殺[illegible]
本屋[illegible]
[illegible]
鹿峠や 櫻の[illegible]
男ひ[illegible]
[illegible]
[illegible]
鹿の[illegible]
[illegible]
山[illegible]
一[illegible]

一具
大橋
徒面
角丸
閑史
[illegible]村
羽人
晩壷
三[illegible]
伸女
[illegible]士

[illegible]
雨の鹿峠[illegible]
[illegible]や 門叩く人[illegible]
[illegible]
[illegible]
古口や鹿[illegible]
明星や尾上[illegible]
[illegible]鹿[illegible]
[illegible]

我竟
徒山
五渡
草池
宗羽
永狐
曲翠
桃清
一子
徒元
桃[illegible]

鹿笛

鹿笛や[illegible]狸の[illegible]つゝみ
[illegible]笛乃上手[illegible]

鹿角や[illegible]角付[illegible]人[illegible]あり　部明
鹿笛や[illegible]つ[illegible]わ[illegible]く西東　水巫
蛇入穴　入あ[illegible]や[illegible]秋[illegible]ま[illegible]や[illegible]蛇[illegible]穴　護物

冬至庵庚年　輯
八雲東溟　校合

九月

山[illegible]と二[illegible]ま[illegible]九月の那　宇南
あ[illegible]ま九月日和や藪の恩　水魚
蕭寺も少[illegible]し九月の[illegible]　石丈
[illegible]し九月の那[illegible]　西誓
田[illegible]九月の那[illegible]　素鹿
手[illegible]や[illegible]九月の那　子路
蕭[illegible]の[illegible]三日の入九月の那　千兮
[illegible]九月の[illegible]

長月　長月やあゆみとまりし小田の稲　万和
　　長月やうきひの雁の来る事　尺牘
　　長月の彩る月和てはけり　万穎

菜月　菜月の清みあるかな一京の星　良徳
　　菜月や日の長くして枝底　南枝

后雛　月の秋を雁を寄せし后の雛　午心
　　きつつつしも元宵の秋や后の雛　南枝
　　はつこうるまつまるはつもふ　平波
　　雛の菊のきれもとそもや中勢　護物
　　菜の月や雁を惜まれる皆の座　[illegible]
　　黄菜きつつ其分の名はけくまず　花全

菜

菜の月や雁よりもつつみてく　英角
かすみのうつ秋をあてたふきくのも　支考
はつ月の菜をうつりぬ一座哀　抱儀
掬子の秋ある秋や菜の月もし　許六
きくたつ月哀あ秋霧のうもり　杉風
椀都月秋ちあ如信や菜哉　李由
元来や月しも岩和のきくのも　奠宝
以馬の秋ある秋一秋の秋　鬼貫
菜をくけ先へもあ和をう那　正秀
他らもうんと黄ひ如鶏きく　浮雀
菜さあるる屋敷のもの和きくのも　国那

古筆のさしかけてあり簾戸の葉
苗札をまゝ人〻葉ぶりの那
六条ゝ葉ゝ花けやゝ和の葉
夕月ゝ夕ゝ夏ゝ秋ゝ冬ゝ
秋ふりぬるくもゝ葉ぶり
牡丹葉やつゝきのくゝ
きゝゝゝ知きわゝゝ白ゝ
世ゝ人ゝ嘆世やゝなりきくの
小ゝつゝゝゝゝゝ葉の花
何ぶゝ葉ゝ人ゝ
信ゝゝゝ葉ぶゝ

朴我　朴我
撥月　撥月
梅宝　梅宝
山分　山分
古翠　古翠
稲物　稲物
其山　其山
風也　風也
古老　古老
茅年　茅年
布席　布席

葉牡ゝ　石佛
葉烟ゝ　礼ゝ
ゝゝゝ　ゝ
下ゝゝ　ゝ
山風ゝ　板戸御
ゝ葉ゝ　ゝ
むゝゝ　ゝ
葉ゝ　ゝ
掃摘ゝ　ゝ
葉一　ゝ
ゝゝ　ゝ

宝上

呉秋
士言
邦彦
雪阿
暁春
五明
士朗
樗亭
芸帆
新年
一肖

花橘に時鳥しのびきくの声
桶に植きくを葉ちるこころなりけり
れんれんと咲きそめにけり家の前
物ゝ音葉ちる白きく哀なり
田舎にうまれてきくの花
葉に春の雨のきれ霽れ
赤いきく淋しかりけり葉に雨
赤きくは人を寂しがり
かゝりたる扇にえがきくの花
庭のきく花みる老の嘆なりけり
きくのやきくのうれ

南枝　濱吉
主布　和七
尚白　成美
乙二　素堂
二丘　蕉三
尚白

知来舎に菊蔬て御手葉入れ
葉畑をまきてきく庭の小家の前
きくの花めでくれ人を訪きけり
嘆くめでくれけりきくの花
為きくの白き物きくに西日の前
きくの雨打たれ花は光りけり
ちりもかくのひく音多い塚の内
ちりをはきくの白き花の庭の前
捨てあるきくの葉ん〻黄ばりけり
嘆き野に生きくん〻やきくを入
ちりかゝる音たゝ編てけりけり

蝶蕉　一茶
素風　阜池
抱儀　嘯舎
社有　丁巴
蔡静　鈴堂
二之

[illegible]

[illegible]

[illegible]

白雲紅葉ちる尾張やま紅葉
七つ時しぐるゝ日ぐれ
きりのみち安芸はあり紅葉日和の船
人丸紅葉のうら波みちの船
服部の一枝きぎ紅葉の船
日ぐれ雲きりの白かるみちび
ぬれ鶯紅葉日和紅葉ぬれ
鳥のけてゆくものしみちび　下毛
さりしとうぶしてぬれ紅葉び
夢の夢て連ゆくぬれ　下毛
一ひらゝ小松ぬれまつぬれ紅葉

月化
東漑
雲居
籬屋
壽樸
万吹
甚山
梅二
三岳
蓬卜
旦松

あくせくとゆけとも紅葉り
木枯ひとしきぬ梅のみち
一枝ぬれ山ぬれみち
紅葉ぬれ紅葉ぬれ
紅葉ぬれ紅葉ぬれ
紅葉ぬれ紅葉ぬれ
一枝ぬれ紅葉ぬれ
紅葉人の書ぬれ紅葉ぬれ
土蓬の唐土つくもみち船
ちらつく雪紅葉ぬれ紅葉ぬれ
紅葉ぬれ月紅葉ぬれ紅葉みち雪
紅葉ぬれ八重紅葉ぬれ紅葉ぬ

東柳
波風
稽月
槙女
解力
万籟
得蓋
柴美
百川
梅宝
士朗

[illegible]ちぢに用意加[illegible]紅葉二か
島のつゝり歌小[illegible]の紅葉歌
あさやけさかけさかけさか

うゝ桔や仲の廿き里つき　四季
末枯や庶峯かゝる海一吉　句翠
うゝ桔や高う見ん橋もして雲　赤月
末枯や代約束の藤板　梅曙
うゝ桔や西日よ移る嶋の板　暁壷
末枯や寺社菊寺居よ形まし　流芝
九重を中よ那山のみきれ　蓼古
二ツ罪ふ欲を知るこそ外の市　一嵐
むし見一遠女よ毎夜外の市　徐如
外市や子を負ふ人の秋　子康人
人中を高く枯ふし市の外　四誓

野山錦
外市

后月

枯ゝ高ふ手社外外市の外　鶏年
本屋の庭ま〻ぬよ后の月　子英
紙さ一の鞘よ高ま有り后の月　正秀
淡山を見ゝ后の月見ゝ那　玄来
后社月ゝ月よ一星のゝ　鬼貫
酒つゝ層の高や后社月　長父
鞍らくハ社社ま〻のちの月　然年
出る高の峯ま社あり后の月　仲淡
鶴ま〻ゝ芋ま〻う中后の月　其山
燈よ高るむ〻ま〻后の月　一功
川淡の蕃ま〻ぬ〻ま〻后社の月　葉人

芦葦
素樸
幻芝
千鶴
一具
宝樑
小柳
支考
樗良
蒼虬
逸流

素柳
千瑞
月居
波月
柳宝
会用
来英
粤隠
清甚
杜有
素堂

月もちろん和名本草に十三夜
酒の肴て一人寄せて十三夜
戸はさしてあかけあり十三夜
きのふ今日月の出けり十三夜
柳の行ひとりくらし十三夜
錦の吉きうとて月の十三夜
ちれたれの指折り十三夜
蛍ちるかしら時まつく十三夜

豆名月
さて月もうつさし栗の豆名月

月名称
御一さて残して月の名称

星月夜
うつれ出く扇夜あり星月夜

重恵
苣村
嵐湖
雁願
子路
濱吉
玉園
鬱
雲濤
長富
言丸

星月夜 京都市東山区大きさよ
名月 名月をとれる山家はあり
初秋 初秋の雨ぬれて
角文字 角文字のいと月もり
芋名月 芋名月和名抄
御近宮 御近宮が初月はあり
近文 近文はいと
懶別 まつとして
寺社 寺社の
今年酒 今年酒の文字の
酒 酒の

尚白
泉池
桂雨
苣村
子路
胡及
梅人
雲濤
梅芙蓉

新酒　松風を新酒を雅を山路の露
新酒の舟をもとめ
子猫酒や猫舌ひ出嬉しと
風の名の紅葉ちり走る酒の露
内へ来く吾妻ちり酒新酒
馬に背ちゃ一あり以新酒の
住吉の祝と言ふ会言酒の那
前上に出しもして新酒寿
挑灯の消ちて寄る新酒
一銚子あてうひきうの志ん酒が
子猫酒ちゃのゆうきを忘れ

支考
宗因
莫角
そ孤
松軒
五徳
柳居
嘯雪
庫丈
閑那
白雄

濁酒　松の葉ちゃ新酒の
新酒ちゃ古きを酒や濁酒
ちゃ酒のをちゃ新ちゃ人
木瓜　里ちゃ木瓜新ちゃ
ちゃ平や白ちゃ木瓜ちゃ
木瓜ちゃ伊勢の人ハ西ちゃ
小豆の粥ちゃ油ちゃ
栗　茅舎は椎ちゃ
椎の実ちゃ椎ちゃ
生栗を拾ちゃ山路ちゃ
栗　栗を拾ちゃ秋ちゃ山

諸九
百明
伯先
夢古
月庵
其角
泥足
尺州
来英
其角
摩内

[illegible]

[illegible]

[illegible]

柚味噌　江陵の万年長生柚を柚味噌
　　柚人のとりまぜて柚味噌
　　望越の柚味噌の句かなるのこれ
　　秋あり　七里日の柚味噌も格
金柑　金柑の古きを外さるれけり　蕪村
柘榴　本然痩る市ゝ実のへさゝろこれ　蕪村
梨子　五梨子や紫秋の秋の森の味　乙州
枳実　実ゝ枳実つゝ沖ゝつゝ枳実の形　路通
　　下の葉枳の実をゝく匂ひこれ　其角
橘実　井の中へ落る青り橘実　重翠
　　三味

菩提子　布ゝ子ゝ人ゝ菩提子ゝ落る　井眉
菓茣　山菓茣ゝ月ゝ落ゝ小ゝ子の形　士朗
　　磯山や菓茣拾ふ子ゝ袖袂　白雁
梅擬実　赤ゝ赤ゝ梅擬の実のこれけり　杜國
木実　冥山のゝく拾ゝ木ゝ実のこれ　鳥酔
　　ゝ拾ゝ木の実ゝ交ゝ鹿の糞　季里
　　実ゝ一椎先ゝ拾ゝ　西鶴
草実　草の実ゝ拾ゝ行く虎渓人これ　文鯉
蕣　蕣の花ゝ国ゝ牡丹花ゝ　芳月
芦　引舟ゝ綱ゝ芦ゝ芦の花　雲契
芦穂　芦の穂ゝ里船ゝ来ゝ　道彦

一もとの芦に秋やせり堰の水
芦に秋や豊原雪の川もと
秋せり　秋後や淀の長橋
秋後や淀の長橋　まる山の
月ゝ　秋思　月は雲に
秋思　葱芽
葉生姜
初茸

防川
白翠
乙二
雅定
梅仙
雪房
白雄
雪代
法圓
智月
盛年

初茸や小松ゝ
松ゝ茸や高ゝ
松ゝ茸や都
松ゝ茸や淀
松の子ゝ松露
紅茸
板茸
菌特
茸うり
茸うり
茸うり
茸うり
茸の
茸うり

梅照
雪代
惟然
保吉
士朗
乙二
文速
去来
雪代
其角
西鶴

ようやくに五月加へて菌の孔
茸物や寒さ寒さ秋
茸うや一人殊さ、蓋の上
並べ置く鍋者
茸うや面白あり一つの俳想
うたしと喰て出り中菌物
又ようやく月の末のこの孔
初鴨 初鴨や三田の水波の上
尾越鴨 指さして尾や越の鴨のあ
尾を越る鴨や山くまかり
花成蛤 蛤集くまおとれ出て蓋

貝殻 貝殻
蓋 蓋
小園 小園
波間 波間
蓋雨 蓋雨

綱代打 綱代打蓋ものうと
霧 霧や かうくと鐘撞出
霧雲 霧雲や清切さまに二三日
霧雲や 霧雲や一枝吹一山秋
霧雲や蓋 霧雲や蓋や蓋
霧時雨 霧時雨
霧雲 霧雲や蓋
袖つまさ 袖つまさ
雨色 雨色
霧時雨 霧時雨
霧時雨 霧時雨
一絶 一絶
立秋 立秋
霧 霧

俳諧新
長崎
梅令
雨考
北枝
蓋堂
源郎
梅令
市山
白雄

秋雨

秋雨や伽羅剃り下ろの鐘遠
たちさまくるや時雨て秋乃雨
杉乃葉に地よりしみ入る秋雨
菜畑や一うねひたるきの雨
二度三度降りぬきて度や秋乃雨
あれのもとに蓼ちる秋の雨
篭をもれて老ぬ秋の雨
住ぬれば畳やぬれて秋の雨
故郷よ人の恋もあまれぬひきの雨
屋根に物もたてぬ嵐や秋の雨
秋雨や二日潮くるよ出雲崎

秋風
聖坡
丈芝
李由
三夢
角よめ
大江丸
士朗
一具
竹家
子猫

筑紫より機まく家や秋乃雨
小田日居まうこんを秋乃雨
居まさまいま蔦を秋乃雨
新子して俳あるけり秋の雨
古人の財新を老らん秋乃雨
耳よりて茅舎の音やあれの雨
庭の雨あれの中やしられけり
きりぎりす秋ましられと鳴けり
いくあるとも秋のりを時雨けり
ろの土のきよをつくり秋乃雨
ま世代茅舎やまこと重ね秋の雨

百明
子瑞
龍六
住月
帆丸
芝夷
百明
五明
一具
石芝
拙美

秋著

岳舘
吏部
紫義
[illegible]
其角
壁坡
山居
蓊子
西誓
泳陶
紙書

士朗
蒼帆
月居
紫義
阜池
晨湖
二丘
角あ
子猶
傘下
卜枝

住おうとあるのうつはきの秋　小園
うつくしと人よ生れて秋乃秋　一茶
あるのうけ秋ぬ本ら秋し秋の秋　波因
何の子秋あそんれ秋ら秋秋秋　三浦人
さと本秋ら秋さ一はきの秋　素風
秋のうれせんうつ秋く身の時　百明
塩よまそ秋くまそう秋乃秋　風朗
雁秋寺や生ぬ河ら秋秋　籠唐
物ゝよ猫つゝけり秋の秋　梅宝
大秋ゝる家ゝと秋の夕ゝう那　許六
生ゝうんまそ秋ゝ秋の夕ゝう秋　扇和

秋空

ほのけう仕舞わて秋の秋　呉石
夢を赤く紫鄙夢ゝ秋の秋　白郎
唐淳や背負ゝ秋の秋　聖丸
秋のうれ雑ゝ月秋ゝ秋ゝる　植丸
寒ゝ寺仏強ゝ秋の秋　杜年
秋のそゝ尾ゝの秋よ秋れゝり　夷角
根秋本の色ゝ秋ゝ秋の秋　玄来
風の秋を思ゝけり秋の秋　知七
上ゆゝゝ下ゝる寺や秋ゝ　紅兆
秋ゝ唐ゝ唐ゝ居ゝる秋秋　大笑
月秋ゝゝ兵力ゝ河ゝの秋ゝ　樓唐

秋雲　花前　文子

秋野　酒色

秋山　定邦

秋の雲や四方の人の行きかふ　曉雲

風吹きて雲の行きかふ秋の雲　勾芝

蓋法師の行きかふ秋の雲　蕉孔

見なれたる山も秋人の行きかふ　木海

一日もおくれしきて行きかふ　小園

分よりも秋の雲の行きかふ　支考

秋の野や紅葉ぬる野の色　撫恵

秋の野や振袖ぬる野の色　

秋の野や振袖ぬる野の色　

秋の野や振袖ぬる野の色　

人麻呂の歌にあきのみ　玉葉
秋海　釣舟の遠ゝ見えてあきの海　雲葉
遠山をかすみこめて秋の海　百首
秋川　柳の葉に流れ来て秋の川　文亭
まさるとは水の秋の川　二三
秋水　引潮を待てとゞまる秋の水　篇海
四方に袁山を深けり秋の水　杜蘭
屋ゝ戸ゝに減て流けり秋の水　士朗
流れ出て去る月の高あれの水　月化
弩時の色衣流よりはなれ秋の水
何ゝを見流し居るあれの水

ひつゝ田　ひつゝ田や稲穂ひしゝて蛙の声　一阿
ひつゝ田や夕月の月明り　南枝
夕稲　夕を新米炊ぎ人〳〵一種蔓　幸方
夕秋　夕秋や新米ぬかつゝれ家　太祇
夕秋や別涼ぬるゝ夕あるゝ　乙由
夕秋の四五日ゝ過ぬ秋の那　文草
夕秋やまゝ〳〵人を法せ　越人
夕秋の月を明の鈴を那　史邦
夕秋や絶きれの彩義　杜芥舎
夕秋や何ゝまゝ如雨の声　三津人
夕秋を移れ初ゝ鈴を秀　一阿

以秋を月の秋宮に見立てる
以秋や星まつり　徐子人
以秋や育女に秋の唄　夏渓
以秋や秋の雨に月の雲　琴高
以秋や秋の雨に月の雲　子龍
以秋や秋の雨に月の雲　陸同
以秋や秋の雨に月の雲　喜村
以秋や秋の雨に月の雲　士朗
以秋を尾花さかりの頃　一葉
以秋や蓼の穂の穂　寒丶
秋よりつゝけり秋の山　槐翁
松樹に酒を人や　雪の秋　[illegible]
おしろの芋に月出て秋　仲臺

秋名残

秋名残　秋西行
名残り　秋の名残
名残の月　蓼光
名残の月　小国
名残の月　金蘭
名残の月　仙化
九月盡　九月尽
菊の花　九月尽
松の花　九月尽
柳の花　九月尽
柳の花　九月尽　生上
柳の花　芦塚
柳の花　山子
柳の花　南枝
柳の花　佳年

後月弦月切々九月者　晩產
まくまをつんやくまを九月者　卓化